入込噺

瘤辨慶

笑福亭松鶴

桂米之助繪

大津の宿、岡屋半兵衛門方で一泊致しました。何しろ春先の事で道者が澤山で混雜して居ります、廣い座敷で皆が集りまして酒を飲み始めました。歌を謠ふたり三味線を彈いたりして喧々と言ふて居ります、處へ一人の男が顏の色を變へて馳込んで參りました。

「なんや吃驚りした、如何しなはつたんや」

「今私が雪隱へ這入りましたら、雪隱の中に大きな蜘蛛が居ました」

「蜘蛛、貴郎大きな身體をして居て蜘蛛ぐらい怖いのだすか」

「私は生來いてから蜘蛛を見ると如何な小さい蜘蛛でも戰慄して身の毛がよだちますので」

「ハヽア蜘蛛ぐらいで、それは妙だすなア」

「イヤそりや何とも云へまへんで」

「さようか」

「一體人間には必らず何か怖いものがあるものだす、と云ふのは、生れました時に床の下へさして胞衣を埋めます、その胞衣の上をば初めて通つた者が一番怖いと云ひますので、父親が一番最初に通つて置きます」

「ハヽア、すると此のお方の胞衣の上を初めて蜘蛛が通つたんだすナ」

「そうだす」

「然う仰しやると私は鼠が一番怖うおます」

「サア鼠が矢ッ張最初に胞衣の上を通つたんだつしやろう、貴郎は何が怖うおます」

「私だすか、私は鼬が怖うおます」

「然うすると鼬が胞衣の上を通つたんだす、貴郎も何ぞ怖いものがおますか」

「ヘエおます、私は又げじ〳〵が怖うおますね」

「するとげじ〳〵が胞衣の上を通つたんだす、貴郎は何ぞ怖いものがありまへんか」

「私でも怖いものはあります、私は誠に馬が怖いので」

「それも初めて胞衣の上を馬が通つたんで」

「うだ〳〵云ひなアんな、床の下を馬が通りますかいな」

「そらマア胞衣を埋めてる時に戸外を馬が通つて啼いたんだつしやろう、貴郎は」

「私は小犬が怖いので」

「小犬、ハヽア矢ッ張り胞衣の上を通つたんだすな、貴郎は」

「私は雷が怖いので」

「其の時に矢ッ張り上で雷が鳴つたと云ふ樣なもんだすな、貴郎は」

「私は借金取が怖うおますね、矢ッ張り借金取が胞衣の上を通つたんだつしやろうか」

「空談云ひなはんな、併し人間には怖いものもありますが、又好きなものも有るもんで、貴郎も嫌いなものがあれば好きなものもありますやろう」

「ヘェ、私も好きな物が有ります」